

令和6年9月12日

令和6年全国大学附属農場協議会 技術職員集会式次第

会場：山梨大学 LC 館 11 号室

時間：11:50～13:50（昼食 12:50～13:50 含む）

1.開式の言葉

技術職員集会実行委員長 山本哲楠（山梨大学）

2.技術職員集会担当幹事よりご挨拶

岩手大学 平田統一准教授

3.意見交換会

テーマ：

- 1・外実習中の対応について
- 2・積雪期の実習について
- 3・組織見直しに伴う業務の変化について

4.昼食（山梨大学附属農場紹介）

5.閉会の言葉

次回開催当番校 佐藤浩幸（北海道大学）

令和6年度技術職員集会意見まとめ

1・外実習中の対応について

○北海道大学

北海道大学では、労働安全衛生法に基づき各事業場ごとに安全衛生管理体制が敷かれており、「安全衛生本部」が本学の安全衛生及び学術研究に関する安全を推進するため、全学的な視点に立って安全衛生に関する業務に対し指導・監督を行い、さらに教職員及び学生その他の安全の確保、健康の保持増進を図るために必要な施策の企画、立案、実施している。

また年に1回、教職員・学生・院生を対象に一般安全教育を実施する他、化学物質取扱講習会等を実施している。

学生には「安全な野外活動のための基礎知識」という冊子（日本語版・英語版）を配布及びダウンロードが出来るようになっている。

○北里大学（八雲牧場）

北海道でも実習シーズン（7～9月）に30℃以上が続き熱中症対策として下記の3つを行っている

- ① 製氷機の導入：実習所に製氷機を設置し、頭部などを迅速に冷却できる環境を整えている。また、氷を入れた麦茶を実習の合間に提供している。
- ② エアコンの設置：来年度から、実習所の各宿泊部屋にエアコンを導入し、実習全体の快適性を向上させることで、外での実習にも好影響を与えることを期待している。
- ③ 水分補給の推奨：学生にはペットボトルなどの飲料容器の携帯を許可し、適切な水分補給を促している。

また熱中症対策マニュアルはないが別途緊急マニュアル（コロナおよびアレルギー対策）で代用している

・その他 ヒグマ対策として遭遇や発見に関するマニュアルを準備している。

○岩手大学

緊急時（学生の体調不良・ケガ等）については、大学が作成した「安全衛生マニュアル」に則り対応することになっている。農場内にはタンカやAEDを備えており、職員が使用に関する講習を受けている。また、夏場の実習では、簡易テントの設営や水分補給用のウォータージャグを準備するなど、熱中症対策を行っている。

○宮城大学

学外実習は、畜産領域と蔬菜領域で各々年1・2回程、県内の施設へ本学のバスを使用し実施しております。

○帯広畜産大学

北海道でも連日 30℃超える日が続く場合があります。熱中症対策として自動販売機の設置（2～3 年前に設置）、事務所に経口保水液を常備しています。

また、センター内に AED は設置されているのですが、救命講習等は受講しておらず、使用方法を知らない職員もいるので、緊急時にスムーズな処置ができるか不安があります。

○東北大学

非常時マニュアルとしては、実習前に教員による体調不良時の説明があります。気温、湿度などの環境変化に対応して 4 5 分程度を目安に水分補給やトイレ休憩などの休息をいれています。体調不良時は事務室の近くに休憩室を設けており、経口補水液も完備しています。公用車を一台、実習時に追従させ休憩室への搬送ができる状態です。その際にエピペン（蜂対応）や AED などは常時車両に携帯しています。

実習中を想定してはいませんが避難訓練（防災訓練、AED の取り扱いや人工呼吸方法などの救命訓練）は教職員、学生合同で年一回、最寄りの消防署監修のもと行っています。

○福島大学

1 マニュアルの作成

農場実習は 1 年生対象に行うため、作業や用具等についての知識は白紙状態であることを想定し、「福島大学農場実習における安全の手引き」を全員に配布して説明を行っている。

2 実習実施時の対応

ほ場での待機車両としてワゴン型の公用車に救急箱等を準備し、体調不良者を収容して休ませるとともに、必要があれば保健管理センターまで搬送している。

待機教員とは場の各担当教員、食農学類支援室それぞれがトランシーバーを持ち連絡体制を取っている。支援室からは落雷や降雨の情報を提供いただいている。

ほ場にはトイレがないため、近くの会社に協力いただき借用している。

4 月・5 月と全員作業となる稲刈り時には、履修学生の誘導や実習中の見守りの補助として学生アルバイト（食農学類 2～4 年）を雇用している。

女子学生が約半数おり、体調不良時に対応できる女性教員（職員）の確保が困難である。

○酪農学園大学

熱中症対策として、こまめな水分補給や休憩を取り入れている。高温時の実習は技術職員の人数を増やし、学生への気配りを強化している。学園内において、年 1 回消防署より講師を招き応急救護（AED の使用、胸骨圧迫）講習会を実施している。圃場施設内に緊急連絡先や火災機器設置マップを表示している。

や病状に対して、あらかじめ対策を取っておくことが最も大切であると考えられます。

(例：危険物の取扱について熟知しておく／機器の取り扱いとリスクについて熟知しておく／熱中症のリスクと対策について組織単位で準備しておく(飲料水や冷房のある場所の準備など・声かけ)／搬送経路に支障があるものは普段から取り除いておく(環境整備)など)

【園芸分野】

・夏季の実習は休憩を入れながら行っているが、今年度より学生の安全を確保するため前期実習の終盤となる7月中旬以降は、露地野菜など炎天下での実習を避け、学外施設見学等の日程を組み替え、高温対策として取り入れている。宇都宮大学は午後の実習が中心であるが、他大学では午前の実習を取り入れている事例はあるのか教えて頂きたい。

・悪天候の場合は教員と相談して対応しているが明確なマニュアルはない。(講義の時間を延ばす。雨予報ならば教室やハウス等で出来る様に農作物を確保して行っている(収穫調製作業等)。

・果樹園の摘果作業等は雨天時でも行っているが、カップを持参しない学生がおり対応に苦慮している。

・包丁を使う実習は(ハクサイ収穫など)耐切創手袋を使用させケガの防止を行っている。

・学生のケガ・体調不良が起きた時、体制がどこまで整っているか(職員が応急手当できるように研修している等も含め)、いい事例があれば紹介して欲しい。

【畜産分野】

怪我、熱中症、体調不良等が起きた際には、適切に対応できるよう、職員が、赤十字や消防の救急救命講習会を受講して、備えています。また、牛舎内に、応急手当用品や経口補水液を常備しています。

○千葉大学

・猛暑日の実習の休憩は担当教員の判断で行っている。

・夏季の実習は温室内では極力行わず、作物を実習作業棟(屋根付き)に運んで行っている。

・実習作業棟にエアコン設備が無いため、なるべく通気性をよくしての流れがあるようにしている。

・緊急時に備え、氷枕や経口補水液を準備してある。

上記の備えをしているが、どうしても外気と同等もしくはそれ以上の温度になってしまい体調を崩してしまう生徒がいる。他大学様ではどのような対応をしているかご教授願いたい。

②職員の熱中症対策として空調服の導入（自己負担）

○玉川大学

怪我人、体調不良者が出た場合は手の空いている教員が応急処置を行う。SA や TA も実習中はいるので怪我人、体調不良者が出た場合は担当の教員に知らせてもらう。熱中症の場合は経口補水液の摂取や冷房設備のある建物への避難を行う。その後、大学のセキュリティーセンターに連絡し、健康院と呼ばれる医療施設に連れて行ってもらう。健康院へ行った後は、そこに常駐している先生の判断で病院へ行くか行かないか決めてもらう。

○日本大学

熱中症対策として、警戒アラート発表の際は実習を行わず、講義に切り替えている。

○信州大学農学部

非常時のマニュアルは学部共通の防災対策マニュアルがあり、緊急時の大学関係と公共機関の連絡先と公共機関へ連絡時の例文が記されています。

実習に対しては安全の手引きの冊子があり、教職員と学生に配布されています。内容は防災についてと、化学実験、動物、野生動物、微生物、遺伝子組み換え、アイソトープ、農場フィールド、森林フィールド、土木、木材加工等の実験実習を安全に行うための注意事項が書かれています。しかし、落雷については記されていません。雷鳴があったときは、実習を行う判断を担当教員が行っています。付近に落雷するような緊迫した事態は過去になく、遠くで鳴っている程度なら建物内や温室中等での実習をしています。実習中の事故は鎌や鋏などで手を切ることや、蜂やオオハリアリの刺咬症があります。事故時は保健室へ搬送し、病院へ行くかの判断は保健師が行っています。

○信州大学繊維学部

当農場では4月～8月までの暑い時期での農場実習が中心であり、緊急時に対応する症状としては熱中症や、野外でのハチや毒虫、毛虫などの虫刺されなどの応答反応（アレルギー反応）、農場実習での農具（鋏、鎌、フォークなど）などの接触事故があげられる。大学の学校医のいる指定病院も用意されているが、緊急時においては近場でもよいからすぐに駆け付けられる緊急病院を決めるようにしている。（当農場は2か所離れた場所に立地しているため、それぞれの農場により緊急時に対応する病院を分けている。）

頻繁に起こりうる、虫刺されには虫毒を吸引するポイズンリムーバーや塗り薬のステロイド軟こう、アイスノンなどを常備し、対処している。また、4月の学部ガイダンス時には実験実習における安全の手引きの農場実習の注意事項の項目にそれぞれの諸注意を記載し、事前の野外実習の注意を呼び掛けている。

万が一の怪我や事故に対する予防措置を具体的にお聞きしたい。
特に最近多く見られる熱中症について対策を知りたい。

○岡山大学

農場と同じキャンパス内に保健管理センターがあるので、急病・ケガなどは、基本的に保健管理センターに対応していただいている。

緊急時に備えて農場にはAEDが設置されており、職員対象に、器具の使用法や、救急救命法、熱中症の講習会を適宜実施している。

○香川大学

実習中に体調を崩した学生がいた場合、事務室または管理棟1階の地域連携室に学生を待機させ、救急車に引き渡す。急を要する場合は、医学部附属病院が近隣にあることから、農場職員が附属病院に共用車で連れて行くこともあった。

農場事務室には緊急連絡先の病院の電話番号や連絡方法が壁に貼ってあり、すぐに対応できるようにしている。

○愛媛大学

- ・非常時を想定した対応マニュアルなどは構えていない。
- ・大雨や落雷等の天候不良時は、あらかじめ実習を休講する場合もあるが、緊急時は屋内や倉庫内での実習に切り替え対応している。
- ・熱中症対策としては、こまめな水分補給を促すとともに、夏場の実習は作業内容を比較的負担の少ないもので計画している。

○広島大学

広島大学では、農場実習における異常気象や地震等に向けた本農場の安全対策としては、担当教員主導のもと、以下のマニュアル・資料に書かれていることを基本として行動する。

I. 全国大学農場協議会でまとめられた、「農場実習の手引き」

※安全対策として

II. 文部科学省 教育関係共同利用拠点事業申請時にまとめられた、「拠点化演習における申し合わせ事項」

※リスク発生後の対応として

なお、学内実習においても、悪天候や災害時における演習の実施・中止の決定は「拠点化演習における申し合わせ事項」と基本的に同様であるが、学内での判断（一斉休校等）が主となる。

庁の発雷ナウキャストを利用する等、想定される危機に対して一定のガイドラインが設けられている。また、その他危機管理マニュアルが存在するが、定期的な訓練や想定を行っていないので、いざ有事の場合にマニュアル通りに対応できるか疑問が残る。

阿蘇実習フィールドは常駐の教職員がいないこともあり、届け出がない限り、学生のみ活動を制限している。また、野生動物やハチおよび毒ヘビについても掲示等で注意喚起を行っている。加えて普通救命講習会を年1回実施している。

○九州大学

「九州大学の教育における安全の指針～学外活動編」に書かれている。

暑さ対策グッズで「使ってみてコレは良かったよ」と言うものを知りたい。

○佐賀大学

①落雷について

- ・基本的に教員の裁量で実施の有無が決まる。
 - ・今年の夏に、「携帯型雷検知器」が導入された。具体的な運用方法については検討中。
- (参考) 携帯型雷検知器 雷探くん 商品紹介ページ

<https://www.myzox.co.jp/data/products/article/862>

②熱中症について

- ・帽子の着用を呼び掛けている。
- ・暑い日には、保冷剤入りのネッククーラーの貸し出しをしている。
- ・冷たいお茶を準備し、実習中いつでも飲めるようにするとともに、こまめに休憩を取るようにしている。
- ・熱中症警戒アラートが出たときは、エアコンが効いた室内での軽作業または講義に切り替えている。

③怪我・体調不良について

学生が怪我または体調不良の場合、ごく軽微であれば学生自身で事務所に行かせたり、休憩場所で実習終了まで待機してもらう。その他の場合には、職員が付き添って事務所に連れていき、応急処置を行い、必要に応じて病院に連れていく。

○宮崎大学

宮崎大学住吉フィールド（牧場）では2014年にGLOBAL G.A.Pを取得し、その後JGAPに移行し、現在まで継続しています。そのなかで様々なルールや手順書の作成、リスク評価などを行いながら毎年更新し続けています。

その中で例えば落雷については労働安全リスク評価で作業中の落雷について検討していて、圃場で実習中の場合は畜舎内実習に早めに移行するなどの対策を決めています。また災害時避難手順や事故発生時の連絡体制のマニュアルを作成しており、実習中の熱中症な

令和6年度技術職員集会意見まとめ

2・積雪期の実習について

○北海道大学

冬季間（積雪期）には実習を行っていません。

通年の実習はなるべく4月から12月までに収まるように計画されている。仮に冬季に実習が行われる場合は、搾乳や家畜のハンドリング等畜舎内で行える内容になる。防寒対策については各々対策するように告知します。

畜舎に来るまでの転倒防止については特に行っておりませんが、除雪を行う程度。

○北里大学

屋外で行う項目がある実習科目はすべて前期の時間割に配置されている。

○岩手大学

積雪期はリンゴの剪定と寒じめ野菜（ほうれん草など）の栽培・調査が屋外での実習となる。技術職員の特別な対応は、剪定作業の現場及びファイロンハウスまでの除雪作業があげられる。その他の実習はすべて屋内での実施で、農場産大豆を使用した味噌の加工（販売用）や、郷土菓子作りの調理実習。また、学生らが取り組んでいるプロジェクト実習（野菜を肥料設計から自分らで考え育てる実習）の成果発表などである。

○宮城大学

大学から附属農場までバスでの移動をしており、事故等の危険を考慮し、積雪期の実習は実施しておりません。

○弘前大学

積雪期は、主に屋内で実施できる実習内容にしています。屋外での実習の際は、事前に、防寒対策の徹底を学生へ周知し、当日の気候によっては、講義のみとしています。

○山形大学

本農場の外実習は秋期で終了するため、冬期は実習がない。しかしながら、農場研究室学生が研究や調査のため来場したり、祝・休日には家畜管理をするAA（学生バイト）も来場するため、積雪期も毎日出入りできるよう道路を管理している。降雪があった際には、技術職員が当番制で除雪し、大雪の際には1日数回除雪を行う。

○秋田県立大学

冬場は積雪量が多く、風も強いので、場合によっては遭難してしまう。そのため、室内で

を超える降雪がある。圃場には冬季間でも研究・教育に使用するビニールハウスがあり、積雪による倒壊を防止することや、各所に雪山ができることで、視界不良からの事故を事前に防ぐためにも除雪作業を重視している。一方で、雪があることにより凍結深度の調査の実施や土壌の塩類集積抑制にも効率的である。

○宇都宮大学

積雪が想定される時期（12～3月）は屋外での実習は少ないですが、秋野菜の収穫の時期（11月下旬など）や桜が咲くころ（4月上旬）に、季節外れの降雪がごくまれにあります。そのような場合は、屋根のある場所であらかじめ収穫しておいた野菜類の調製・袋詰めをする実習や、春季に苗の定植と降雪が重なる場合には屋内での座学や場内の施設等の見学を中心とした実習を行ったこともありました。

1月には果樹剪定実習がありますが、数年前のブドウ剪定実習では降雪があり、震えながら実習を行いました。このような経験を活かし、学生には冬季の実習であり防寒対策は十分に準備して挑む様周知しています。

2月には技術職員全員で果樹の剪定を行いますが、積雪時は安全確保のため中止とする場合が多いです。

畜産分野では牛舎内環境整備（清掃）実習がありますが、積雪による支障はありません。また、農用林管理（落葉梱包）実習がありますが、積雪時は中止となり、後日職員だけで落葉梱包を行なっています。

○玉川大学

基本的に東京では実習期間内に降雪はない。冬期の実習は、ダイコンや薬物野菜の栽培、鋸を使用した間伐、シイタケの菌打ちなどを行っている。

○信州大学農学部

信州大学農学部では12月上旬から降雪があり、植物系の実習は、漬物加工、米の加工と食味試験、ジャム加工、果樹の剪定、イチゴの定植を行っています。果樹の剪定以外は屋内での実習で、屋外で行う果樹の剪定では、吹雪等の悪天候では中止にし、極低温時は、短時間で終了させる等、学生の健康と安全に配慮をしています。動物系の実習は全て屋内で、ロープワーク、牛体測定、ボロ出し、米の加工と食味試験、サイレージ評価、肉製品の加工等の実習を行っています。

○神戸大学

神戸大学付属農場がある兵庫県加西市は年数回軽度の積雪はあるものの、日常業務へ大きな影響を与えるほどの積雪は少ない。また現在学生実習は12月中旬から3月中までの期間では設定されていないため、実習への影響も限定的である。しかし今後厳冬期の実習が

令和 6 年度技術職員集会意見まとめ

3・組織見直しに伴う業務の変化について

○北海道大学

農学部附属農場時代は、農学部本体の事務部と別に事務部がありました。組織改変によりセンター全体の事務部となったため農場専属で事務を行う事務職員はいません。技術職員の事務的な業務量は増えていると言えます。一方で勤怠管理や給与、会計システム等がオンライン化されています。オンライン化で業務が減少したかと言えるか微妙ですが楽な面もあります。

○岩手大学

岩手大学では、平成 18 年 4 月 1 日に技術部が組織化され、農場職員は「農学系技術部」から派遣され、業務に当たるという体制になっている。事務組織は別にあり、技術職員が事務業務も行うという事は現時点ではない。組織化のメリットは、職員の処遇改善の底上げ、業務の内容や目的の明確化などがあげられる。デメリットは、通常業務（フィールド管理・実習補助）以外に、技術部としての業務が発生することがあり、職員の負担増となっている。

○宮城大学

本学では、昨年度まで約 10 年間農場運営および実習支援業務を外部へ委託しておりました。（委託領域は、畜産・作物・蔬菜領域）

組織変更ではありませんが、今年度より委託領域の見直しをし、蔬菜・作物領域については、臨時職員を採用しております。運営見直しによる大きなトラブルはないものの、委託会社は畜産領域のため、土日祝関係なく 365 日業務遂行となり、臨時職員は、土日祝は休暇となることから蔬菜等の灌水やハウスの開閉について、教員や別の職員が附属農場へ出向き対応しています。今後自動灌水装置やハウスの自動開閉装置を設置予定です。

○弘前大学

弘前大学では、工学系・農学系・医学系の技術職員で構成された、「技術部」が創設されました。しかし、これまで主だった成果等がありません。そのため、今後の組織の在り方について、他大学における事例やご意見等をお聞かせいただければと思います。

○山形大学

山形大学では平成 22 年に 3 学科を改組し 1 学科（6 コース）を設置した。その後、平成 31 年には 1 学科 6 コースを 1 学科 3 コースに再編するなど変化してきた。それに伴い、年間の実習数は減少したものの、教員・学生の研究支援業務が多くなり、業務が増加傾向

で予算不足はどこも同じではないでしょうか。

○酪農学園大学

フィールド教育研究センターは酪農・肉畜（肉牛・中小家畜）・圃場機械・作物分野に分かれています。それぞれの分野の繁忙期や人手が足りない時には他部門へ応援作業に入ることもある。横の関係を築くことで、コミュニケーションも高められており、組織として団結すると考えている。

○宇都宮大学

宇都宮大学では、令和8年度に農学部改組が行われる計画があります。具体的な進捗内容は周知されていませんが、場内の業務部門（作物・園芸・畜産・機械／土地利用）が分割されて、それぞれの所属が変わるのか、もしくは部門によっては収益性が高い部門のみ大学本部付けになるのかなど、改組の方向性によっては、これからの業務への向き合い方に良くも悪くも変化が見られそうです。

組織見直しが行われている大学では、どのように業務が変化したのか、宇都宮大学としても非常に興味深いテーマなので、組織の見直しにより、どのように仕事の仕方が変わったか、また、業務がやりやすくなったと感じる点や、逆にやりにくくなった点があれば教えていただきたいです。（技術職員の業務負担は、軽減されたのか、増加してしまったのか、理由とともにお聞かせいただきたいと思います）

○千葉大学

「組織見直しに伴う業務の変化について」に関しては、昨年度のテーマでもありました技術職員の一元化に向け、現在千葉大学では動きがありますが、まだ準備段階であるため、特に回答はございません。また、農場内での組織見直しなどはありません。

○信州大学農学部

信州大学では令和4年に技術職員組織の一元化があり、統合技術院となりました。全学の組織作りの最中で大きな変化は、まだありませんが、一元化した初年度からイニシアチブファンドの支援対象課題採択を行い、採択された技術職員が企画を実施し、研究成果を報告発表しています。また、今年度から統合技術院の業務として学部間インターンシップが行われるので、受け入れと参加が業務となりました。学部を越えたつながりと相互理解が求められていると感じています。

○信州大学繊維学部

繊維学部の附属農場の農場組織は昔から存続していたが、学部の他の技術部（工学系、化学系、生物系）と再組織化を検討し平成19年10月1日から試行、平成24年4月から再

○名城大学

農場として改組等の大きな変化は特にないが、“教務技師”といわれる本学独自の実習専門に行う教育職が無くなり、“技術職員(実習担当)”が新たに採用された。これにより今後、同様の形態を取ることで農場専任の教育職員が減員されるのではないかと危惧する。

○愛媛大学

愛媛大学では今年度、各学部の技術組織が一元化された。

統括技術長が新設され、その技術長に選出された職員らと共に会議を行い、今後の議題や研修等について検討されているところである。

今年度は組織自体を形成している最中であり、今のところ農場にとって業務の変化は無い。

○広島大学

技術職員組織の一元化について

良くなったこと

- ・他部門との人事交流により依頼工作などお願いする事や、部門、班を超えての協力ができやすくなり、お互いの業務が理解できるようになった。
- ・作業依頼・指示に基づき業務を実施するため、附属農場の目標・目的が把握でき、技術職員の目標等が明確となった。
- ・技術職員の所属が技術センターのため、農場運営経費の収支に人件費の影響が少ない。

困っている事

- ・協力しやすくなった半面、技術センターの仕事が入って来るため、農場の管理業務に負担を与えている。超過勤務など多少なりとも影響が出ている。
- ・附属農場の組織再編、教育研究目標の社会ニーズに応じた変化により、スマート技術等が導入され、それに応じた管理業務に対応する必要性が出てきている。

○山口大学

山口大学では令和3年度に総合技術部として全学の技術職員の一元化を行い、農場技術職員の所属は総合技術部へと変わった。実際の業務は一元化前と大きく変わっておらず、変わったところは、会議や交流等によって他の分野の技術職員との接点ができたこと。事務手続きが、所属先と配属先の2系統となり煩雑になった。

○鳥取大学

農学部改組による組織改編とは異なるが、鳥取大学では技術職員組織の一元化により、各学部に属さず、専門分野ごとに構成された4部門に分かれ改組を行った組織の変化を経験している。(H31.4月～)

○鹿児島大学（農学部附属農場）

鹿児島大学農学部附属農場では、農学部改組により新年度から大幅な組織の変化が起こった。これまで、学内農事部・唐湊果樹園・指宿植物試験場・入来牧場の4施設で組織されていたが、入来牧場が共同獣医学部の附属施設となり農学部附属農場から離れることになった。事務は農場事務係（農学部組織のひとつの係）が農場全体を見ていが、新年度からは統合され、附属施設係となり、農場・演習林・牧場（入来）の事務業務を行うことになった。特に事務が農場専属でなくなったが、教員・技術職員・事務の3者間の業務分担に変化が見られてくるのではと予想される。

各大学にお聞きしたいのは、このような組織の変化がこれまでに行われたことがあるのか。ないのか。また、予定されているのかなど伺いたい。また、組織改革による良かった点、悪かった点など教えていただきたい。

- ・実習が改変され、新入生が入学直後に一律で学べる基礎実習（フィールド基礎実習）ができた。それによって、上の学年に上がるにつれて、だんだんとレベルアップしていけるような実習体制となりつつあると感じる。
- ・改組が行われると、旧プログラムと実習が重なり密になる。
- ・新しい実習（スマート農業などの新技術）に対応できるか、心配がある。
- ・改組に伴って、今まで実習を担当していた教員が実習に関わるコースから離れ、依然行っていた実習ができなくなるなど、困ったことになった事例はあるか？（教員体制の変化によるもの）
- ・改組の結果、農場実習コマ数が減少することになった。そのため公開講座やリカレント教育を新たに開講しようと考えているが、他大学の実施状況を教えてほしい。
- ・入来牧場が農場組織から離れたことで、運営予算も大きく変わる事となった。関連して年間の生産物収入目標金額の減額への見直しを検討している（鹿児島大学は、年間収入目標額を見込んで予算配分がなされる。収入が目標を上回れば追加で配分される。下回れば返還しなければならない。運営費確保のためには生産物を販売し増収を目標としてきたが、その風潮を今回見直すことになった。）。他大学の生産物収入についての考え方やそれ以外の増収への取り組み状況があれば教えてほしい。

○琉球大学

- ・令和5年10月より【琉球大学総合技術部（琉大 iTec）】が発足した。総合技術部には18の業務グループが置かれ、フィールドセンター（千原、与那フィールド）の技術職員は熱帯生物圏研究センター（瀬底、西表研究施設）の技術職員とともに、「フィールド技術グループ」の技術職員となった。
- ・技術職員は「フィールド技術グループ（主たるグループ）」と、「総務・広報・地域貢献など」の運営グループの計2つのグループにそれぞれ属している。
- ・技術職員は【総合技術部】、教員と事務は【農学部】となった。総合技術部内にも「総